

# 女性図書館員の恋愛“解禁”小説日米事例研究

## 『蠍のいる森』と *Open Season*

### (翻訳タイトル『パーティーガール』) について

—図書館はどうみられてきたか・8—

佐藤毅彦

#### Japanese-American Case Study observed

#### in the Open love affair Novel of a Woman Librarian : The Cases of *The wood where a scorpion is* and *Open Season*

—Image of the Library (8) —

SATO Takehiko

**Abstract :** In this paper the two novels, the one is Japanese and the other American : *The Wood where a Scorpion Is* and *Open Season* are taken up. Each of them is about a woman librarian's growth through her experience in a love affair. Analyzing them, I try to make clear the differences of the way each woman is described and of the situations in the background of them. Both novels deal with a woman in her 30s working at a library, but their consciousnesses of love affair and reactions to the changes of the circumstances caused by their experiences are quite different : in the Japanese case the heroine is passive and heteronomous, and in the other heroine is active and autonomous.

**要旨 :** 女性図書館員が恋愛を経験することで変わっていく小説として、『蠍のいる森』『Open Season』(翻訳タイトル『パーティーガール』)をとりあげ、図書館員の描かれ方の違いやその背景にある事情を明らかにしようと試みた。ストーリーの中心人物が、図書館に勤める三十代の女性という共通した部分はあるとしても、恋愛に対する意識や、それを体験することで生じてくる状況の変化への対応については、日本の事例は受動的・他律的であり、アメリカの事例では、能動的・自律的であったといえよう。

#### 1. はじめに

2006年春に刊行された、『図書館戦争』は、実在の図書館にも関連性のあるストーリーとして、一般のメディアにもとりあげられ、話題をあつめた<sup>1)</sup>。2006年秋には、続編である『図書館内乱』も刊行されている<sup>2)</sup>。

作者である有川浩は、「Yahoo! ブックス」のインタビューで、「もともとダンナがよく図書館に行く人で『こんな宣言が書いてあるプレートがあったんだけ

ど、面白くない?』って教えてくれたんですよ。見てみると『図書館の自由が侵されるとき、われわれは団結して、あくまで自由を守る』とか、内容が勇ましい。『これはほんとに面白いかも』と思って、この宣言が一番ありえない状況で運用されたらどうなるかを考えてみたんです」と述べている<sup>3)</sup>。また、『図書館戦争』の巻末には、「図書館の自由」に関連したものを中心に、十数点の図書が「参考文献」としてあげられ<sup>4)</sup>、さらに『図書館内乱』の「あとがき」では、「『図書館戦争』発売後、図書館界の方からいろいろな反響を頂きまして、突拍子もない話であるにも関わら

ずその多くが好意的に受け取ってくださって、本当に感謝しております」と述べている<sup>5</sup>。

書評を中心とした月刊誌『本の雑誌』2006年8月号には「特集 2006年上半期ベスト1」が掲載されており、「エンターテインメント・ベスト10」で『図書館戦争』が1位となっている（ただし、ここでの順位決め方は売り上げ部数の多さではなく、座談会参加者の主観によるもの<sup>6</sup>）。インターネットを通じて公開されている『WEB本の雑誌』で『図書館戦争』についての書評をみると、「主人公は図書館の特殊防衛軍（タスク・フォース）に抜擢された直情型の新人隊員、郁」であり、ヒロインの恋愛に関しては「主人公郁の恋愛も気になった」「じれったい恋物語」などとコメントされている<sup>7</sup>。この作品は、内容的に、図書館と関係の深い「戦闘美少女」が活躍するストーリーに、恋愛のテイストを加えたものとなっているといえよう<sup>8</sup>。

## 2. 女性図書館員のキャラクタと恋愛

『図書館戦争』は、ファンタジー的な色彩の濃い作品であるが、より現実的なストーリーの中にも、図書館の職員を主要なキャラクタとしたものの中には、恋愛に関するエピソードが含まれているケースがある。図書館は、女性が多い職場でもあり<sup>1</sup>、その恋愛がなんらかのかたちでストーリーに関係してくるものは多い。

たとえば、図書館や図書館職員が登場する映画について、継続して数多くの作品を検証している飯島朋子は、「めがねをかけた地味な女性というイメージの図書館員は、日本映画にも外国映画にも数多く登場する」と、女性図書館員の地味さに言及している<sup>2</sup>。一方「利用者と図書館員との出会いは、そのほとんどの場合が、図書館員は女性で利用者は男性だ」というコメントもある<sup>3</sup>。

そうした中で、女性図書館員が、それまでの状況から、恋愛を経験することで変貌していく小説の日米の作品をとりあげて検討することにより、図書館員の描かれ方の違いや、その背景にある状況の一端を明らかにしようと試みた。

今回取り上げた日本における作品事例『蠅のいる森』<sup>4</sup>の作者である小池真理子の小説には、登場人物が図書館を利用する場面や、主要なキャラクタが図書館に関係した人物であるケースが多数含まれており、その内容はかつて分析対象とした<sup>5</sup>。そこでとりあげた

作品のひとつ『欲望』が映画化され、2005年秋に公開された<sup>6</sup>。『小説新潮』に掲載された、原作者（小池真理子）とヒロイン（板谷由夏）の対談で、小池真理子は、板谷が演じる作中の女性について「結局は分裂してるのよね。類子は女子校の図書館司書をやっていて同僚の男性教師と肉体だけの関係、今で言うセフレの関係にあつて肉体的満足はそこで得ているんだけど、精神的な満足感はずいぶん求めるわけだから」と述べている<sup>7</sup>。

映画『欲望』のパンフレットに掲載されたインタビューで、小池真理子はこのヒロインについて「私が好んで描く女子キャラクターの一人」であり、その共通項として「一人で居られる」ということかな。孤独でいられる、孤独の切なさも、孤独の喜びも知っているような女性」「いつも内面を覗き込む習性がある、それでいて普通の女の子の人」と述べている。一方、篠原哲夫監督は「昔から文学を読み続けていた、今は図書館司書の女性」「阿佐緒に比べると地に足つけた堅実さがある」「ちゃんと今の仕事に満足し、恋愛でもきちんと格闘している」「自分の身の丈を知った女性像」と発言している<sup>8</sup>。

また、海外の作品事例としてとりあげた『パーティーガール』<sup>9</sup>の著者、リンダ・ハワードは、複数の受賞歴のある、ロマンス小説の人気作家とされ、日本でも多くの作品が翻訳されている。

## 3. 女性図書館員の恋愛“解禁”小説<sup>1)</sup>

### 3-1. 『蠅のいる森』『Open Season』（翻訳書タイトル『パーティーガール』）

図書館に勤務する女性のキャラクタについて、『蠅のいる森』では、「美千代は人間嫌いの図書館司書」<sup>2</sup>、『パーティーガール』では、「顔・髪型・服装すべてが地味でさえない図書館司書デージー」<sup>3</sup>と紹介されている。そうした地味なキャラクタの女性図書館員が、いずれも、恋愛がきっかけとなって、停滞状況から脱却していく、というストーリーである点は、双方に共通したものである。

両者が勤務しているのは、どちらも公共図書館であり、『蠅のいる森』の有馬美千代が勤務するのは「日々野図書館」、『パーティーガール』のヒロイン、デージー・アン・マイナーは、「アラバマ州ヒルズボロの図書館館長」という設定になっている。

（以下に示すページは、『蠅のいる森』『パーティーガール』の文庫版のものである）

### 3-2. 恋愛“解禁”前の状況と変化への志向

#### 3-2-1. 有馬美千代の過去と日常

『蠍のいる森』の登場人物である、有馬美千代は、「日々野図書館に勤めて八年」(p. 7)で、年齢は「三十一」(p. 71)である。通勤途上の場面に「日比谷通り」「白金」(p. 6)などの東京都内に実在する地名が使われているストーリーの内容から、公共図書館で、名前の類似した「都立日比谷図書館」を連想させる<sup>1)</sup>。

実家のある札幌には両親が住み、「電話を引くことを拒否」し、「両親が勝手に取り付けて行った電話を黙って取りはずし」している。両親は「環境のいいマンションを買ってやった」(p. 21)が、「車は自分で買った」(p. 22)のものであり、「白金」(p. 6)のマンションから車で通勤している。

「父も母ももともと精神的にひ弱で、臆病で、おまけにひどく閉鎖的な性格だった。ひとりっ子である美千代を可愛がり、ガラスでできた人形でも扱うように大切に育てはしたが、肝心の親としての厳しさは与えてくれたことがなかった」(p. 18)と感じており、「三十にもなるというのに私は臆病で神経過敏で、こうして世間を恐れながら、いつも不安にかられている不幸な人生から抜け出せないでいる」(p. 19)状況にある。

へやには、「オーク材でできた気に入りの本棚」があり、「買い集めただけでまだ読んでいない本」もある。本を読む際にはカバーをつけ、「本が汚れるのは我慢できない。いつもそうやってカバーをつけながら読むので、彼女の蔵書はどれも新品同様だった」(p. 22)また、新聞を読む際にも、「政治にはほとんど関心はなく」「熱心に読むのは社会面と読者投稿の欄」(p. 24)ということだった。

#### 3-2-2. デイジー・アン・マイナーと変身への決意

『パーティーガール』のヒロイン、デイジー・アン・マイナーは、「三十四歳の誕生日の朝」に「三十四歳になったけど、期待に胸躍らせるようなことはなにもなかった」「生まれてからずっと真面目ないい娘でとおしてきたが、それでなにかいいことがあった？ にも」(p. 19)と感じていた。

これまで、「三十四歳で未婚、婚約の経験なし。熱烈(ホット)な恋をしたこともない——なまぬるい恋さえも。大学時代には羽目はずして遊んだこともある」が、現在は「母親とおばと住んでいる。ふたりとも未亡人」であり、「退屈。その言葉が思いがけずにグサリときた。彼女をひと言で説明するとしたら、きっと誰もがその言葉を選ぶ」(p. 20)で、「不器量

でおもしろみがなくて、退屈なオールドミスの図書館司書には、惚れぼれと乳房を眺めてもらうことなどないのだ」(p. 22)と感じていた。

そうした状況で、「真面目でいい娘(グッドガール)でいるのをやめる」(p. 23)決意をする。「図書館における一点の汚れもない記録が、無味乾燥な人間である証拠だ」「望みを叶えるつもりなら、行動に移さなくてはならない。なにかしなくてはならない。時間はどんどん過ぎていく」「でも、見た目を不良娘(バッドガール)みたいにするのはどう？ せめてパーティーガールになるのは？」「パーティーガール。大声で笑ったり、ふざけたり、いちゃついたりダンスをしたり、短いスカートをはいたり——これならできそう。たぶん」(p. 25)と考えた。たとえば、化粧品についてもよくわかっていないが「それなら勉強すればいいじゃない、でしょ？ これでもいちおう図書館司書なのだ。調べ物にかけてはチャンピオン級だ」(p. 27)と思う。髪、化粧、服、などの変身のためのリストをつくり、「これでよし。パーティーガールになるための青写真はできた」(p. 27)と感じて、同居している母親とおばに変身する決意を告げると、ふたりともそれに賛成する。

### 3-3. 女性図書館員の勤務する図書館と業務内容

#### 3-3-1. 有馬美千代と日々野図書館

美千代は、親しくなった相手との対話で「『来週、あなたの図書館に行ってみようかな』それは困る、と言いかけて美千代は口をつぐんだ。あの図書館で、終始、うつむき加減になりながら、もくもくと機械のように動きまわっている自分をこの人には見せたくない。神経を病んだ有馬美千代、人の視線がこわい有馬美千代、いつもここそと人目を避けながら、与えられた仕事以上のことは決してやらない、のっぼで能なしの有馬美千代……」(p. 170)というやりとりをしている。図書館での自分の姿を、親しい相手に見られたくないと感じており、そこには、図書館という職場や図書館員という職業に対する肯定的な意識は希薄である。それでも電話については、電話番号を聞かれ「『うちのほうじゃなくて、図書館のほうに……。二階の人文科学室の事務室にいます』」(p. 170)と答えている。

また、有馬美千代が勤務している図書館の場面は、「美千代は図書館の受付カウンターに座っていた。二階の真中にある小ざっぱりとしたカウンター。右側が人文科学室で、正面が社会科学室、左側が階段とロビ

一で、カウンターの後ろが事務室になっている。中高生が冬休みに入る前だったし、歳末で人々が動き回っているせいか、入館者は少なく、館内は静かだった。暖房がちょうどいい具合に効いている。夕陽が差し込み始めた室内で、本を開いたまま居眠りしている若者、窓の外の木立をぼんやりと眺めながら、漫然と書架の間に突っ立っている老人、ノートを取りながら、キャンディーを食べる女子高生……美千代の好きな、落ち着いた風景が遠くに広がっていた」(p. 237-238)となっている。その業務については、「館外貸出を希望する人を受け付け、登録カードを確認してから本を渡す作業は、簡単で煩わしいことは何もない。一度に複数の人間がカウンターの前に並ぶということは減多になく、手がすいている時は、うつむきながら持ってきた文庫本を読む時間さえあった」「たまに書架から本を失敬して、自分の紙袋やバッグにしりのびこませる輩があるので、受付カウンターに座った時は注意するように、と言われていたのだが、いちいち注意を払ったことなど一度もない。事故が起こるたびに叱られるのは職員たちだったが、美千代は少なくともいつも見て見ぬふりをしていた。泥棒よばわりして何になる。本に対するフェティシズムは、本好きの人間ならよく理解できることだ」(p. 238)とあるように、図書館の業務が、何か専門的な知識や経験が必要な仕事であるという印象には乏しい。また、彼女が、仕事に対して積極的な意思やプライドを感じているようにも思えない。

図書館に勤めるようになったきっかけについては、女性の友人との会話で、「『私も本はよく読むんですよ』美千代ははにかみながら言った。『本好きが昂じて、図書館に勤めたくらいだから』」(p. 73)と発言しているが、それも図書館の業務自体に対する積極的な評価とは考えにくい。「図書館というところは、視線が人々の心の中でしか動かない唯一の場所だった」(p. 239)という思いにもそれが反映されている。

他の女性職員(山岸エミ子)については「『今日は暇ねえ』事務室から出て来た同僚の山岸エミ子が美千代に声をかけた。五十過ぎの未婚の女で、パーマつけない脂ぎった長い髪に白いブラウス、紺色のタイトスカート、というスタイルを変えたことがない」「美千代が勤め始める前からここにいた。楽しいのか、寂しいのか、感情というものがまるで見えてこないタイプの女で、五年後も十年後も、いや地球が減びるその直前までこの図書館の二階の事務室で、同じ格好をしたまま、こまごまと動きまわっていきそうな感じがす

る」(p. 239)という、突き放したような描写になっている。結局、「美千代はカウンターの下の文庫本を広げた」(p. 239)とあるように、読書好きであることは感じられても、利用者に対するホスピタリティやサービス精神はうかがえない。

### 3-3-2. デイジー・マイナーとヒルズボロ図書館

「ヒルズボロは南部のちっぽけな町」(p. 78)であり、デイジーは、母親やおばと同居している自宅から、職場まで車で通勤している。「自宅は図書館からたった五ブロックのところだから、天気の良い日は環境保護のためにたいてい歩く」(p. 33)こともある。「ちっぽけな町の図書館司書では、館長といえどもたいした給料をもらっていない。館長とは立派な肩書きだが、中身はたいしたことないのだ。人事権は町長にある。デイジーの権限は、けっして潤沢とはいえない予算のなかから購入する本を選ぶこと、それだけ」(p. 33-34)とあるように、小規模な図書館ではあるが、唯一の専門職員で、図書館長のポストについている。また、妹のことについて母親と話している場面で「『ベスは自分のことを、あなたほど頭がいいとは思ってないのよ。あの子は高校しか出てないけれど、あなたは修士の学位を持ってるわ』」(p. 68)という母親の発言には、デイジーが修士号を取得していることが示されている。

図書館が登場する場面では、「正午まで、ほかに職員はいない。午前中の来館者はほとんどいないからだ。人が増えるのは午後で、学校が終わってからだ。もちろん、夏の間はこのパターンも変わるが、それでも利用者の大半は午後にやってくる」(p. 41)ということで午前中はデイジーが一人で勤務しており、午後からは、それぞれ、12時-9時、5時-9時、までの時間に勤務するパート職員がいる。「数時間でもたったひとりであるのはデイジーだけだが、それだけ大きな責任を負っているのだからしかたがない」(p. 41)と感じている。

図書館で提供しているサービスについて「州のヴァーチャル図書館を、彼女はもちろん誇りに思っていた。アラバマ州はこの分野で国全体をリードしている。州民なら誰でも、どの図書館でも登録することができて、何千もの新聞や雑誌、論文や百科事典、学術資料や医学専門誌などに、家にいながらにしてオンラインでアクセスできる」(p. 43-44)と紹介している場面がある<sup>1)</sup>。また、後に親しい関係になる警察署長が利用者として図書館にやってきて、オンライン図書館にアクセスできなかったと言われ、ブラウザをアッ

ブグレードする必要があることを教示する。『『こういうのが得意なんだな』『ヴァーチャル図書館ができてから、やらざるをえなくなったもので』』(p. 80) という状況になってきたことが示される。原著が刊行されたのは、2001年であり、すでに、アメリカでは、田舎の図書館でも、電子メディアによるサービスの提供がすすんでいた、ということがその背景にある。

### 3-4. 恋愛“解禁”とパートナー

#### 3-4-1. 有馬美千代と望月源太 (児童文学作家)

有馬美千代は、ビーグル犬をマンションの入り口で保護し、それをきっかけに、翻訳をしている、江田真樹子と知り合いになる。「三十一？ 私もよ」(p. 71) というように同年代で、単身である、という点でも共通している。『『私も本はよく読むんですよ』美千代ははにかみながら言った。『本好きが昂じて、図書館に勤めたくらいだから』』(p. 73) ということも自分から話している (この作品のタイトル『蠅のいる森』は、イギリスの女流作家が書いた本を真樹子が翻訳したの訳書のタイトルという設定である)。

美千代は「三十過ぎるまでただのひとりも恋人と呼べる男をもったことがない、とはとても言えなかった」(p. 97) ということで、「咄嗟に作った話を話し出した」(p. 96) とある。実際には、美千代は「これまで男と関係したのは二度しかない」「最初は大学の時で、相手は同じアパートに住む」男であり、「二度目の男は、車を買った時、美千代を担当した営業マン」(pp. 99-100) であった。

美千代と真樹子は意気投合し、「人見知りの激しそうな、神経質な感じの女であるが、真樹子は彼女と会っていると気持ちが落ち着くのを感じた。彼女とは、口では言えない同じ感覚をうなずきあえるような、静かな安心感があるのだ」(p. 122) と感じる。

ある日、美千代は、真樹子の翻訳書出版記念パーティーに招待される。『『でも私なんかが行ったら迷惑じゃない?』』「美千代はなんとかして行かずにすむ方法はないものか、と思案した。『人見知りするし、華やかな雰囲気には似合わないし……』』(p. 158) とためらっていた。結局パーティへ出席することになるが、そのときの服装も、「ダークブルーのワンピース」「黒の別珍の襟とベルトがついている。ドレシーというだけが取柄の服だった。母親と名のつく人種なら、ひとり残らず、娘に着せたいと望むであろうオーソドックスな服で、十年たっても流行に関係なくデパートの婦人服売場に残されているようなしろものだった」

(p. 160) とある。

パーティーでは、真樹子の父親の教え子であった「望月源太」という童話作家を紹介される。彼は、「三十四のこの年になって」(p. 167) まだ独身であった。美千代は源太とはじめて二人きりで会うときも「ゆうべ念入りにシャンプーして髪の毛の形もうまい具合にまとまっているし、よく眠れたせいで化粧のりも悪くない」「グレンチェックのジャケットと黒のタイトスカートの組み合わせ」(p. 173) という格好で出むいている。

美千代は、ちょっとしたことがきっかけとなって、神経症的な強迫観念にとらわれ、ある人物に対して異常な行動をとってしまうが、その後源太に会いに行つてすべてを告白する。「すべてを話し終えたときは、午前三時を過ぎていた」「『私はこの病気を治したいと思っているの。それに治るんじゃないか、って思い始めているの。そのためにあなたが必要だ、なんて言ったら……迷惑なのかしら』」「源太は一層、激しく美千代を抱きしめた。くぐもった声が耳に囁いた。『あなたがどんなに精神を病んでいても、僕は迷惑だなんて思わないよ』」「『あなたは精神を病んでいるんじゃない。神経が少しばかり繊細なだけなんだよ』』(p. 311) 『『そういった症状を引き起こすものはね、たったひとつしかないのさ』』『それは自意識だよ』』『自分のことを意識しすぎるからだ』』(p. 312) 『『私はそんな生易しいものではなかったわ。人を殺そうとまでしたんだから』』『でも殺さなかった。そうだろう? あなたにはできない。できっこない。殺そうと思うことだけがあなたの中であなた自身を救う方法だったんだ』』(p. 312) という源太の言葉に救済され、『『あなたに必要なのは、自意識をコントロールする強さだ』』(p. 313) と告げられる。

#### 3-4-2. デイジー・アン・マイナーとジャック・ラッソ (ヒルズボロ警察署長)

ジャック・ラッソは町の外からやってきた新任の警察署長で、「肉体的には見栄えがいい」が、デイジーは「筋骨たくましい人間は頭が悪いと、はなから決めているほど単純ではないが、その手のタイプは好みではなかった」(p. 42) 「町の噂によれば、おおかたの独身女は彼を最高にいい男だと思っているらしい。ということは、彼を毛嫌いする自分のほうがおかしいのか」(p. 43) と、デイジーは感じていた。図書館にはじめて彼が入ってきたとき『『なにかご用件でも?』』とっておきの司書の声で、きびきびと親切そうに尋ねた。公共の場で働くこと、とくに図書館で働くこと

は、一種の技術だ。もちろん人びとには本を読んでもらいたいから、その気にさせなければならないが、それと同時に、図書館にも利用者にも敬意を払っていることを示さなければならない」(p. 43)という反応をしている。

ジャック・ラッソは「シカゴとニューヨークで働いたことがある」(p. 50)人物だが、子供のころに「ヒルズボロで何度も夏を」「毎年少なくとも二ヶ月間」(p. 87)「十歳のときにはじまり、十五のときまで続いた六回の夏」(p. 88)を過ごしていた。ヒルズボロに住んでいた大おばが亡くなり、「古い家が自分に遺され」「ほとんど時を移さず、ニューヨークからヒルズボロに引っ越すことを決心した。離婚したばかりだったし、市警でも着実に昇進していたとはいえ、ストレスの溜まる厳しい仕事に疲れを感じていたからだ」「彼自身、三十六歳になっていた」(p. 89)という経緯があった。デイジーは通常の利用者に対するのと同じように対応するが、署長の傲慢な態度に不快を感じる。翌日、再び図書館に、警察署長が来ていたが、「努めて司書らしい表情と声音を装った」(p. 75)態度で接する。署長は「上機嫌で図書館を出た。ミス・デイジーとやりあうのはまったく楽しかった」(p. 87)と感じていた。

一方、デイジーは、「三十四歳の誕生日の朝」(p. 19)に、自ら決意し、ビューティー・サロンに行って髪の手入れをし、ショッピング・モールで耳にピアスの穴をあけ、洋服、バッグ、アクセサリ、などをアドバイスにしたがって買う、など、さまざまな変身のための努力を自らに課した。そして「このルックスを無駄にするなんてもったいないことだ。もう二度と、自分でこのヘアスタイルをそっくり再現できないかもしれない。しかも、化粧はしたまま……。そう思ったとたん、デイジーは大きく息を吸って心を決めた。いまじゃなきゃだめ」(pp. 122-123)と感じ、ひとりでナイトクラブへ出かける。

その服装について「デイジーは、袖なしの白いシャツを第二ボタンまであけ、カーキ色のスカートにパンプス。金色のアンクレットがほっそりした素足を強調している。ここではめったに見かけない、クールでクラシクな女」(p. 125)というものであり、「あら、この人、わたしを誘ってるんだ。そう思ったら、全身に生気が漲った。これがナンパ！ほんとうに男がわたしをナンパしている」(p. 125)というシーンも経験する。その直後、クラブでの乱闘事件に巻き込まれ、居合わせた警察署長のジャック・ラッソに救出さ

れる(p. 130)。そのあとの対話で「警察署長でさえ、わたしの格好がいかに野暮ったいか気づいていたのね、とデイジーは思った。なんて恥ずかしい。『わたし、心機一転するんです』」(p. 133)と語っている。ストーリーの冒頭では「彼女の服装は地味——つまり退屈。髪型も退屈なら顔つきも退屈。生き方そのものが退屈なのだ。三十四歳、ちっぽけな町の、めったにキスされることもない、オールドミスの図書館司書。日々の振舞いからしたら、八十四歳の老女と大差なかった」(p. 20)とあったが、それが、自らの意思で変身し、積極的な行動をとっている。

数日後、再び、ナイトクラブに出かけるときのファッションは「生まれてはじめて買った赤いワンピース」「ブロンドの髪は、シンプルで洗練されたスタイルのままに揺れているし、化粧は薄いけれど顔立ちを際立たせている」「ワンピースは」「肩は幅二インチのストラップ、深くえぐられた——でも、けっして深すぎない——ネックライン、ほっそりとフィットしたウエスト、そして膝上丈のふんわりしたスカートが歩くと脚のまわりで揺れる。今日も灰褐色のパンプス、足首で金色のアンクレットが輝いている。つけているアクセサリはこれとイヤリングだけなので、とてもクールですっきりして見える」(p. 185)という描写になっている。

警察署長のジャック・ラッソは「デイジーは無邪気だが扱いにくく、うぶだが聡明で、手厳しいもの言いをするがこれっぽっちも悪意がない——そういう人間は早々いるものではない。彼女の色の異なる瞳が、古風な流儀が、どこまでも率直なところが、彼を惹きつける。駆け引きをしないどころか、駆け引きそのものをわかっていない」(p. 158)「図書館であんなに間近に座る前から、デイジーのことをかわいいと思っていた。ただ近くで見たからこそ、彼女の肌が赤ん坊のようにすべすべで、透明感があることがわかったし。片方がブルーでもう片方がグリーン、変わった瞳にも気づいたのだ」「ジャックは以前よりもひんぱんに図書館に立ち寄ることにしていた」(p. 159)と感じていたこともあり、デイジーがトラブルを回避できるような行動をとっている。

はじめは反発しあっていたふたりだが、やがてデイジーは「じろじろ見られるとわかっていたから、いつもより髪型と化粧には気を遣った。きれいに装うことがすっかりあたりまえになっているのだから、おもしろい」(p. 214)と意識が変化し、「いったい何年ぶりだったのか思い出せないくらい。ずっと昔のことだ。

それは自分のせいにほかならない」「何年もキスされていなかったせいで、極端な反応を示してしまったのだ」(p. 218) といった場面を経て恋愛的にも盛り上がっていく。

#### 4. 女性図書館員と恋愛“解禁”小説

同じように女性図書館員が、ストーリーの中心的キャラクターではあるが、居住している土地が、都会である東京と田舎(南部のちっぼけな町)という相違がある。同じ公共図書館とはいっても、大勢の他の職員の存在が想定される大規模の図書館の一職員と、小規模でも専門職の館長というポストについている違いがある(日本では人口の少ない地域には、そもそも図書館が存在しないところも多く、図書館があっても、専門の職員を雇用していないケースも少なくないと思われる)。

発表された年代が異なる(『蠅のいる森』1987、『*Open Season*』原著 2001) こともあり、有馬美千代の勤務している「日々野図書館」は都市部の館であるにもかかわらず、電子メディアを活用したサービスには全くふれられない。一方、デイジーの勤務先は「アラバマ州ヒルズボロ」「南部のちっぼけな町」だが、ヴァーチャル図書館を介した様々なサービスが利用可能な状況になっている。

双方とも、三十代の女性図書館員が、恋愛体験によって変化していくストーリーであるが、そのプロセスについても細部には違いが見受けられる。『蠅のいる森』の有馬美千代は、その出会いは、友人を介したものであり、友人の開催したパーティーで引き合わされ、そのことがきっかけになっている。出会いのあとも、自らの神経症的な精神状態について悩みを持っているが、結局、パートナーに告白し、すべてを許容される。このパートナーとなる男性も児童文学の書き手であり、自らも、自分と会った直後に女性に自殺未遂をおこされてしまった体験を持つ人物であった。

『パーティーガール』のデイジー・アン・マイナーは、その三十四歳の誕生日に自らの意思で、変革を決意し、周囲もそれを後押ししようとしている。服装や髪型を変え、自らの意思でナイトクラブにも出かけていく。その変身には、多少のためらいもあるが、ポジティブな姿勢があふれている(先の有馬美千代もパーティーへの参加をためらってはいるが、友人に招待されたものであり、すべてが見知らぬ人達であふれている場所へ出向いているわけではない)。パートナー

は、都会からやってきた、マッチョな警察官で、その人物にあこがれている女性も多い。

服装についても、有馬美千代は、はじめて二人で会うときにも、保守的なファッションを選択しており、一方、デイジーは自ら変化することを決意した後は、様々な人の手を借りながら、変身したファッションでナイトクラブにも出かけていく。

変化について、日本の事例では、受動的・他律的であり、アメリカの例では、能動的・自律的であるといえよう。変化の前の状況は、図書館に勤める三十代の女性という共通した部分はあっても、その後の展開は異なっている。

#### 5. おわりに

『配達赤ずきん 成風堂書店事件メモ』は、「今年二十四歳になる杏子」「三つ年下の多絵」(p. 11) の、女性書店員コンビが、書店を舞台にした事件の謎解きにいどむ、連作短編集である<sup>1)</sup>。「はじめに」でも紹介した月刊誌『本の雑誌』2006年8月号の「エンターテインメント・ベスト10」では、『図書館戦争』が1位で、『配達赤ずきん 成風堂書店事件メモ』は2位となっている<sup>2)</sup>。作者の大崎梢は、東京創元社のホームページで公開されている「Web ミステリーズ」で「長いこと書店で働いていました」と述べており<sup>3)</sup>、書店での勤務体験を背景に、作品を執筆していると考えられる<sup>4)</sup>。

この本の巻末には、「書店のことは書店員に聞け」という、実際に書店に勤務している女性4人に対するインタビューが掲載されている<sup>5)</sup>。そこでは「ああ、機転の利く店員なら、なるほどそうするだろう、と思わせます」「本屋さんの日常が書かれてるので、あるあるこういうこと！ いるいる困ったお客様！ と苦笑したりしながら時間を忘れて楽しく読めました」「書店員の仕事ぶりがここまで忠実に描かれている話はちょっと他にはないですよ」などとコメントされている。

ところで、このインタビューの出席者については、司会者が「本書に倣って妙齢の女性に集まっていただき」という発言をしている部分がある<sup>6)</sup>。また、続編の『晩夏に捧ぐ 成風堂書店事件メモ(出張編)』<sup>7)</sup>について、作者の大崎梢は、インタビューに答えて「そういえば、第一弾の『配達赤ずきん』をお読みいただいた方から、『杏子と多絵のロマンスも期待しています』との言葉を、複数ちょうだいしました」とコメン

トしている\*。図書館や書店など、出版に関連した職場を舞台とした作品の中で、作中に登場する女性の恋愛に関連したストーリーに対する関心が、読者のがわにも一定程度、存在することをうかがわせる発言といえよう。

女性図書館員が登場し、その恋愛模様がストーリーに描かれるフィクションの作品は多数あり、本稿でとりあげたものは、あくまでもその一例である。ただ、日本の女性図書館員が、これまで、たとえば、テレビドラマ『素顔のまま』では、妊娠中絶の経験があり社会から逃避的な日々を送っていたり<sup>9</sup>、宝塚歌劇『再会』では、図書館に勤めているというヒロインは、宝塚の娘役史上、空前のダサイ女性、という設定であったというのも事実である<sup>10</sup>。そうしたケースをはじめとして、多様なストーリーをとりあげて、分析することが、図書館員、特に、女性図書館員のイメージを解析するプロセスの一助となることを、考えている。

## 注

### 1. はじめに

- 1) 有川 浩『図書館戦争』メディアワークス, 2006. 3  
石田汗太「探検エンターテインメント 本好きだから」『読書新聞』2006. 2. 27, では、「作中で図書館の自由の象徴とされる『日野図書館』は、現実の図書館史でも、貸出重視の『市民の図書館』運動を最初に実践したことで知られる。近年、こうした図書館サービスのあり方が、『本の売れ行きを阻害している』と、出版社や作家団体から批判を浴びていることは周知の通りだ」とされている。
- 2) 有川 浩『図書館内乱』メディアワークス, 2006. 9  
続編の刊行に際して、『本の雑誌』掲載された、メディアワークスの出版広告では、『図書館戦争』「65,000部突破!」とされている。(『本の雑誌』2006. 10, p. 55)  
有川 浩「図書館内乱 後夜祭 昇進試験, 来る」『電撃 hp』vol. 44, 2006. 12, が発表されている。  
有川 浩『図書館危機』メディアワークス, がシリーズ第3作として、2007年2月に刊行予定となっている。
- 3) 有川 浩「Yahoo! ブックス」(<http://books.yahoo.co.jp/>) (2006年2月22日掲載)  
作家「有川 浩」のファンサイト (トップページに「このサイトは、作家『有川 浩』さんを応援しています。作家公認の『非』公式サイトです」と表示されている)「有川 浩 応援結晶」(<http://www.geocities.jp/sei-shushironeko/>) では、「寄稿」の中で、作家「有川 浩」による『『図書館戦争』取材記』が公開され、その冒頭部分は「独立行政法人全国図書隊連合 編集印刷」の『館報』という体裁をとっている。なお、ページの末尾には「この取材記は、有川 浩氏より当 HP へ

ご寄稿いただいたものです。有川さんのご好意により公開させていただいております。その為、この取材記につきましても、無断転載等はお断り申し上げます」との管理人「白猫」のコメントが付けられている。

- 4) 有川 浩『図書館戦争』メディアワークス, 2006. 3, p. 342
- 5) 有川 浩『図書館内乱』メディアワークス, 2006. 9, p. 354  
『図書館雑誌』2006. 12, pp. 816-817, では、「特集★2006・トピックスを追う」の中で「『図書館戦争』刊行をどうみるか」を掲載している。  
須永和之「ちょっと待った! 『図書館戦争』『図書館内乱』」では、「実際の図書館とかけ離れたものと割り切って、エンターテインメントとして十分に楽しめるが、憲法改正が論議され、教育基本法の改正が国会で審議され今日、『図書館の自由』のために戦闘を合法化する小説は不気味すぎる」と指摘されている。  
狩野ゆき「『図書館戦争』『図書館内乱』よもやま話 - 生徒とのやりとりから -」では、「自然発生的には『図書館の自由』は意識されないんだと思った」「この本はいいきっかけを与えてくれたと思う」「有川氏が図書館のことをよく勉強していることに驚かされた」と述べられている。
- 6) 『本の雑誌』2006. 8, pp. 14-18  
これに関連して、インターネットで公開されている「asahi.com BOOK 2006年08月30日」<http://book.asahi.com/fair/TKY200608300300.html> では、「『本の雑誌』2006年上半期エンターテインメント第1位。現在6万5000部を突破し、多くのファンを生んでいる痛快エンターテインメント小説」と紹介されている。
- 7) 「今月の新刊採点」『WEB 本の雑誌』(<http://www.webdokusho.com/>) 2006. 3 では、『図書館戦争』について、読者から募集された7人の書評が掲載されているが、「図書館が武装化、図書館員が銃撃戦、なんなんだこれは。面白すぎる破天荒な設定。あり得ない発想」「主人公は図書館の特殊防衛軍(タスク・フォース)に抜擢された直情型の新人隊員、郁(延命ゆり子)「表現の自由について真面目に考えさせられる一方で、主人公郁の恋愛も気になった」(島田美里)、「郁と上司・堂上とのボンボンずけずけ、ときにキツツイ会話の応酬は、一見反目しているようで実は相性良さが感じられ、なにやら甘酸っぱい」(松本かおり)、「はねっかえりの新人図書隊員のお仕事とラブ(?)がコミカルにえがかれる」(佐久間泰子)、「読んでるうちにこっちが恥ずかしくなってしまうような、じれったい恋物語ですね」(新富麻衣子)、などのコメントがみられる。
- 8) 「戦闘美少女」については、下記を参照。  
斎藤 環『戦闘美少女の精神分析』太田出版, 2000

## 2. 女性図書館員のキャラクタと恋愛

- 1) 山本宣親「第1章 図書館ってどういうところ」山本宣親編『図書館森時代!』pp. 29-30, では、図書館学の受講生について「女性があまりに多く、男性がとても少ないのです。図書館現場もこれを反映して女性



- 職員が多いのです」「図書館の業務は主として女性の仕事だと見られているとしたら、そのことに問題があります」「これまでの司書の一般的な印象は、はっきりいって本は好きかもしれないけれど、人間はあまり好きではなさそうな感じです。口重で暗く、消極的なイメージが先行するのです」と述べられている。なお、山本宣親は、公立図書館の館長を経験したのち、教員として図書館学教育にも携わっていることが、同書 (p. 360) の「おわりに／著者紹介」に示されている。
- 2) 飯島朋子「第一〇章 『阿修羅のごとく』—眼鏡をかけた図書館員』『映画の中の本屋と図書館 後篇』日本国書刊行会, 2006, pp. 47-50
- この続きの部分では「明るくて元気なのは、『メジャーリーグ』(一七八九年)のリンと、『パーティーガール』(一九九五年)のメリー、『ハムナプトラ/失われた砂漠の都』(一九九九年)のエヴリンくらい」「『君は僕をスキになる』(一九八九年)のヒロインは、恋人に『めがねない方がいいんじゃない』と言われて、コンタクトに変えたりする。同じく日本の映画『ひみつの花園』(一九九六年)にも、めがねをかけた地味な図書館員が登場して、『雑誌は貸し出しておりません』と冷たく告げる場面がある」と述べられている。さらに『君は僕をスキになる』のヒロインについては、「知的で芯の強い女性という感じがする」(飯島朋子「第九章『君は僕をスキになる』—日本映画の女性図書館員』『映画の中の本屋と図書館』日本国書刊行会, 2004, pp. 37-39) という記述もある。
- なお、映画『パーティーガール』については、飯島朋子「第二六章『パーティーガール』—整理業務』『映画の中の本屋と図書館』日本国書刊行会, 2004, pp. 88-90, で紹介されている。図書館の司書をめざし、図書館職員の助手としてはたらく女性が登場する内容だが、これは、今回分析対象とした、リンダ・ハワード著『*Open Season*』(翻訳書タイトル：『パーティーガール』)とは、別のストーリーである。
- 3) 飯島朋子「第一九章『ザ・ダイバー』—利用者と図書館員の出会い』『映画の中の本屋と図書館』日本国書刊行会, 2006, pp. 83-85。また、飯島は「映画に登場する女性図書館員は、めがねをかけていて地味で暗いというイメージが定着している感があるが、男性図書館員も地味な職場でおとなしいという印象のようだ」(飯島朋子「第四二章『さよならコロソバ』—一九六〇年代の図書館映画』『映画の中の本屋と図書館 後篇』日本国書刊行会, 2006, pp. 175-178) といった点も指摘している。
- 4) 小池真理子『蠍のいる森』集英社(文庫), 1987
- 5) 佐藤毅彦「日本の女性ミステリ作家と図書館・続—小池真理子・雨宮町子のケースについて— 図書館はどうみられてきたか・4」『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』vol. 39, pp. 41-53
- 6) 『保坂尚輝 vs. 布袋寅泰』戦争を生んだ魔性ボディ 高岡早紀 スッゴイ裸身のすべて』『週刊現代』2004. 7. 24, では「来年(注:2005年)春公開予定の映画『欲望』」「映画の原作となる同名小説は、大人の恋愛描

写に定評のある小池真理子氏」「図書館司書の女性の性が扇情的に描かれている。主人公の女性を演じるのは高岡だ」と報じられたこともあった。実際には、高岡早紀が演じていたのは、別の女性の登場人物(袴田阿佐緒)であり、学校図書館に勤務する「青田類子」を演じたのは、板谷由夏であった。

- 7) 「板谷由夏, 小池真理子『欲望』映画化記念対談 欲望に正直な女でありたい』『小説新潮』2005. 11, pp. 158-165
- 板谷由夏は、1975年、福岡県生まれ。NHK教育テレビ「イタリア語会話」に出演していたことがある。こうした番組について、小林信彦は「教育テレビはよく女の子を発掘するなあ」「その時点では新人アイドルだった人たちを、教育テレビは抜群のタイミングで使う。それはイタリア語だったり英語だったりするのだが、ほくはひそかに〈色仕掛け外国語教室〉と呼んでいる」(小林信彦「アイドル・2004」『本音を申せば』文藝春秋, 2005, p. 132)
- 8) 「Interview 原作者・小池真理子氏 篠原哲雄監督」映画『欲望』パンフレット, 2005
- 9) Howard, Linda 『*Open Season*』Atria Books, 2001
- ペーパーバック版は、下記の通り。
- Howard, Linda 『*Open Season*』Pocket Books, 2002
- 本稿では、下記の翻訳書を主にテキストとして使用した。
- リンダ・ハワード著、加藤洋子訳『パーティーガール』二見書房(文庫), 2002
- 同書カバーの「著者紹介」では、「全米女性の圧倒的な支持を誇る人気作家。ロマンス小説の部門でさまざまな賞を獲得している」とされている。
3. 女性図書館員の恋愛“解禁”小説
- 3-1. 『蠍のいる森』『*Open Season*』(翻訳書タイトル『パーティーガール』)
- 1) 「*Open Season*」とは、狩猟などの「禁猟期間」が“解禁”になることであり、そこから、このタイトルを付した。
- 2) 小池真理子『蠍のいる森』集英社(文庫), 1987, 裏表紙カバー
- 3) リンダ・ハワード著、加藤洋子訳『パーティーガール』二見書房(文庫), 2002, 裏表紙カバー
- 3-2. 恋愛“解禁”前の状況と変化への志向
- 3-2-1. 有馬美千代の過去と日常
- 1) 小池真理子『闇のカルテット』双葉社, 1989, には、「都立公園図書館」(p. 3)を利用する人物が登場する場面がある。これは、都内有栖川公園に実在する「東京都立中央図書館」を念頭においているものと思われる。
- 3-2-2. デイジー・アン・マイナーと変化への決意
- 3-3. 女性図書館員の勤務する図書館とその業務内容
- 3-3-1. 有馬美千代と日々野図書館
- 3-3-2. デイジー・マイナーとヒルズボロ図書館

1) 大都市であるニューヨーク公共図書館を中心に、アメリカにおけるヴァーチャル図書館の充実振りについて紹介している下記の著作がある。

菅谷明子『未来をつくる図書館—ニューヨークからの報告』岩波書店(新書), 2003

#### 3-4. 恋愛“解禁”とパートナー

3-4-1. 有馬美千代と望月源太(児童文学作家)

3-4-2. デイジー・アン・マイナーとジャック・ラッソ  
(ヒルズボロ警察署長)

#### 4. 女性図書館員と恋愛“解禁”小説

#### 5. おわりに

1) 大崎 梢『配達赤ずきん 成風堂書店事件メモ』東京創元社, 2006

2) 「特集 2006 年上半期ベスト 1」『本の雑誌』2006. 8. pp. 14-18

3) 「Web ミステリーズ」2006. 05, 東京創元社ホームページ (<http://www.tsogen.co.jp>), では、「今春、一身上の都合によりリタイアしましたが、長いこと書店で働いていました。仕事の話をする、本屋好き(そして本好き)の友人がそれはそれは喜んでくれました。私にとってはありきたりの日常ですが、聞く人が聞くと面白いらしい。ちょっとしたエピソードに目を輝かせ、驚いたり吹き出したりするのを見て、どうせなら、お話ししてみようと思い立ちました。もうひとつ。どうせなら、ミステリ仕立てがいいな、と」と述べられている。

この本は、東京創元社「ミステリ・フロンティア」シリーズの1冊として刊行されているが、このシリーズには、図書館での日常をストーリーにした、下記の作品がある。

森谷明子『れんげ野原のまんなかで』東京創元社, 2005  
その帯には、「そこでは、誰もが本の旅人になれる。のどかな図書館を彩る、季節の移り変わりとささやかな謎」と記されている。この作品については、下記で取り上げた。

佐藤毅彦「図書館員出身作家のメンタリティ 女性作家が描く女性図書館員像—図書館はどうみられてきたか・7—」『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』vol. 42, pp. 65-81

4) 同じ傾向の作品として、書店員の目から見た、書店

での日常のできごとを扱ったエッセイコミック『暴れん坊本屋さん』シリーズが、刊行されている。(コミックでは、雑誌『ウイングス』『ウンポコ』に掲載されたものに、書き下ろし作品が追加されている)。

久世番子『暴れん坊本屋さん 1』新書館, 2005. 10

久世番子『暴れん坊本屋さん 2』新書館, 2006. 4

久世番子『暴れん坊本屋さん 3』新書館, 2006. 10

1巻の裏表紙では「切なくも心温まる作品を描くマンガ家久世番子。実は彼女にはもうひとつの顔があった」「マンガ家兼書店員の久世番子が本屋さんの本音や裏話を描いた赤裸々エッセイコミック」と紹介されており、表紙には、出版流通の現場で使用されている「売上カード(スリップ/短冊)」や、実在の取次店が使用しているものに類似したデザインの「ダンボール箱」が描かれている。

5) 「書店のことは書店人に聞け」大崎 梢『配達赤ずきん 成風堂書店事件メモ』東京創元社, 2006, pp. 225-238 (このタイトルは、井上真琴『図書館に訊け!』筑摩書房, 2004 を意識したものと思われる)

6) 「書店のことは書店人に聞け」大崎 梢『配達赤ずきん 成風堂書店事件メモ』東京創元社, 2006, p. 225, 司会の戸川安宣(東京 TRICK+TRAP)の発言。これに対して、出席者の一人である、青野由里(松山 丸三書店)は「あ、ほかの方はともかく、わたしは元・妙齢ですから(笑)」と述べている。

7) 大崎 梢『晩夏に捧ぐ 成風堂書店事件メモ(出張編)』東京創元社, 2006

8) 「Web ミステリーズ」2006. 10, 東京創元社ホームページ (<http://www.tsogen.co.jp>)

9) テレビドラマ『素顔のまままで』については、下記でとりあげた。

佐藤毅彦「映像メディアの中の図書館 1992」『公立図書館の思想と実践』森耕一追悼事業会, 1993, pp. 292-309

10) 佐藤毅彦「テレビドラマ『ビューティフルライフ』における“図書館”観の批判的検討 図書館はどうみられてきたか・2」『甲南女子大学研究紀要』vol. 37, pp. 105-135, において、「トップ娘役史上おそらく前代未聞のダサダサなコーディネートで登場」という、作・演出担当: 石田雅也の発言(『歌劇』no. 883, 1999. 4, p. 72)を紹介している。

※本稿で参照したホームページは、2006年10月時点で公開されていた内容です。